

お支払いは現金になさいますかそれとも 【問題編】

《登場人物一覽》

花牧 薫 はなまき かおる
書評サイト管理者
空閑 寧子 くが ねいこ
薫の知人
岬 英司 みさ えいじ
N 大学三年生、推理研会長
大久保 俊治 おおくぼ しゅんじ
N 大学推理研OB
安東 茉莉 あんとん まり
F 大学一年生、推理研所属
木山 耕太 きやま こうた
N 大学二年生、推理研所属
竜崎 芳雄 りゅうさき よしお
大久保の同僚

1

ハンドルを握りながら、花牧薫はフロントガラスから空を見上げた。出発時は晴れていた空が、いまは薄曇りに覆われている。天気予報によると、夕方から明け方まで風になるらしい。

「一度、男の人に訊いてみたかったのだけど」

助手席から声がした。空閑寧子がハードカバーを閉じる。表紙には洋風の棺桶と女性らしきイラスト。『Coffin Dancer』のタイトルがあった。棺桶ダンサー？

「会社の健康診断で検尿のとき、トイレでコップに採尿するわよね？」

ハア、と薫は生返事をした。

「そのとき、使うのは個室？ それとも立ったまま？」

カーナビゲーションの画面に視線を走らせる。もうそろそろのはずだ。別荘地らしく、山道の左右にちらほらとバンガローやペンションの類をみかけられるようになった。

「まあ、空いていれば個室かなあ」

「すべて使用中なら？」

「そのときは、立ったまましますよ」

「他の人がいても？」

唾を飲み込む。なんだろう、この緊張感は。

少し前まで、小説の話題で健全に盛り上がっていたじゃないか。いや、検尿の話題が不健全というわけではない。そうだ、たかが検尿じゃないか。自分はなにも意識する必要はない、当たり前で答えればいいんだぞ。そうさ薫、しっかりしろ。

「しますね。気にする人もいるかもしれないけど、小用のほうはもともと衝突がないし、やってしまう人のほうが多いと思う」

カーナビゲーションのアナウンスがあった。慌ててアクセルを緩める。緑が途切れ、白壁の建物が姿を現した。

「そんなの……やってしまう人が、そんなに……ありが

とう」

寧子は瞼を閉じた。ヘッドレストに頭を預け、唇を小さく動かしている。なにをつぶやいているのか、努めて薫は聞きとらないようにした。

N 大学推理小説研究会会長、岬英司から誘いを受けたのは、二ヶ月前のことだった。

毎年、卒業生や他大学の学生も交えた小合宿をしている。よければ参加してみませんか。一泊二日、ミステリ好きで和気藹々と雑談するだけのイベントですが。

薫は、推理小説研究会のOBどころかN大学の卒業生ですらなかった。推理小説が好きで個人サイトに感想を書き綴り、あるソーシャルネットワークサイトを通じて岬と知り合った。オフ会で顔を会わせたこともあるが、それも四五回だけだ。

正直なところ、どうして自分が声をかけられたのか理由がわからなかった。しかし、とりたてて夏期休暇に予定も無く、大勢に声をかけているうちの一人に過ぎないのだからと気楽に参加することにした。

玄関チャイムを押すと、インターフォンから声がした。出迎えを待つ間、改めて周囲を見渡す。

もっと小さな建物を想像していた。山荘というより「お屋敷」だ。芝生が広がり、庭の奥には白い丸テーブルと椅子が三脚があった。物干し台はどこにあるのだろう。

「ようこそ、鬼灯荘へ！」

扉が開き、背の高い男性が満面の笑みを見せた。パツパツと視線を左右に向け、空閑の顔をまじまじみつめると深くと頭を下げた。

「空閑さんですね！ 俺、N大学推理小説研究会会長の、岬英司です！ 以後、お見知りおきを！」

ひつたくるようにして薫達から荷物を奪つと、ズカズカ奥のほうへ岬は歩いていった。部屋に案内するつもりらしい。

ごめん、いつもあんな感じの人なんだ。薫は小声で寧子に呼びかけた。しかし、相変わらずの無感動な表情のまま、寧子は岬の後を追って歩きだした。

「鬼灯が自生してるのですか？」

「知りません！ さっき命名しました！ やっぱですね、これだけの建物なんだから格好いい名前があつてしかるべきですよ！ 木山め、こんな館を隠してやがったとはミステ

リ愛好家の風上にも置けん奴だ！」

木山耕太は、岬と同じ推理研の二年生だ。眼鏡をかけた理系学生らしい姿を薫は思い出した。当然、この建物は親が親類縁者の所有物なのだろう。

「昨年は、ここではなかったのですね」

寧子が声をかけた。

「え？ ああ、そうですね。去年までは大学のスゴイ貧相な施設で、八畳間に男四人突っ込まれて……あれ？ なんだ、これ？」

階段に足をかけようとしていた岬は、傍らにあった電話台に手を伸ばした。花柄のレースカバーが掛けられた、ダイヤル式の黒電話。脇には住所録が置かれている。表紙に赤字で“Address Book”とあり、アルファベット区切りだ。どうも、いちいち細部で庶民の家と感覚が違う。

しかし、岬が手を伸ばした理由は、そんなことではなかった。

《空閑寧子》

《判決、無罪》

それは、ラベルシールだった。

黄色いラベルシールが二本、水平に並んでいる。幅は三

センチ、長さは十センチといったところ。ゴチック体の活字が横書きされている。

岬は住所録を手にとり、呆然とした面持ちでそれをみつめていた。しかし薫達の視線に気付くと、ハッと息を呑む表情を見せた。シールの端に爪を立て、二本とも剥がした。粘着力が強かったのだろう。紙の裂ける音がした。住所録の表面に、くつきりとシールを剥がした跡が残った。

部屋に荷物を置き、階下に降りてみた。人声が聞こえるのに誘われ、キッチンに足を向けてみる。岬ともう一人、エプロンをした男性がいた。並んだグラタン皿に、鍋の中身を注ごうとしている。

「お……」
薫の姿に気付く、エプロンの男性は鍋を傾けるのをやめた。

「えっと、あの、花牧薫です。今日はよろしくお願いします」

「ああ、さっき来た。てっきり……いえ、大久保です。今日はよろしく」

大久保は、人懐こそうな笑みを浮かべた。鍋を落とさないか心配になるほど腕が細い。

参加者七名の氏名は、事前に岬からメール連絡があった。確か、推理研のOBだったはずだ。

野菜の皮を剥いていた岬が驚いた顔をし、休憩しなくて大丈夫ですかと言った。

「うん、サーブスエリアで一休みしたから。それより、なにか手伝えることある？」

さっきのラベルシールはなんだったのか。薫は気になっていたが、寧ろがなにも訊こうとしなかったため口を挟まないことにした。部屋を案内していたときの岬は始終うるたえていて、冗談や悪ふざけの類ではなさそうだった。

「お風呂の掃除、終わったよ！ねえ、テレビのアレって、なんなの？」

背後から声が出た。振り返ると、戸口に女性が立っている。薫の顔を見つめ、首を傾げた。

「あら？ああ、空閑さんね。初めまして、よろしく」
「ちゃうちやう！茉莉、逆！花牧さんのほうー！」

岬が慌てた声をあげる。薫は曖昧な笑みを浮かべた。

「あ、あらら……へー、アラア、そう……」

茉莉と呼ばれた女性は目を丸くし、なにか珍しい動物を愛でるように視線を上下に往復した。

「テレビがどうしました？」大久保が呼びかけた。

「え？あ、なんか、変なのが貼ってあって」

ガシャンと音がした。岬が包丁を取り落とした音だった。

ほとんど同時に、薫は声をあげていた。

「黄色いラベルですか？」

茉莉が、こくりとうなずく。

「あ……じゃあ、あの名前……花牧……」

鍋を置いた大久保が、いったいどうしたんですと声をあげながら近付いてくる。よくわかんないんだけど、と心える茉莉を先頭に、三人の男達が続いた。

食堂から廊下へ、向かい側にリビングの扉があった。嵌めガラス越しに室内の様子を窺える。

「ほら、あれ」

ガラス扉を開け、中を指差す。大型テレビが部屋の隅に鎮座していた。壁に掛けられるような薄型ではなく、それどころか木目調の化粧板に覆われた時代物だった。

明かりの消えた灰色のブラウン管。

その真ん中に、二本のシールが貼られていた。

《花牧薫》

《判決、無罪》

同じだ。住所録のときとまったく同じだ。

「どうなの？誰かの冗談じゃないの？」

無言でいる男達に苛立つように、茉莉は声を荒げた。

「ちよつと、どうなの？英司の悪ふざけじゃないの？姉さんのことでこんなことしてるなら、許さないよ！」

口調こそ強気だが、岬をみつめる茉莉の顔には怯えがあった。

ちよつと、二人で話をしませんか。岬に誘われ、二人で外にでた。

庭を奥へと進んでいく。背後から自動車の排気音がして、振り返ると一台のミニバンが入ってくるころだった。構わず、岬は足を進めていく。どこへ行くのかと思えば、芝生の上にある白い丸テーブルだった。

高原地帯だけに、湿度が低い。庭木に囲まれ、普段なら木漏れ日が踊っていたことだろう。しかし、いまは薄暗さを感じるほどだった。鬼灯荘に到着したときはまだ薄曇りだった。

たのに、わずかな時間で空は厚い雲に覆われてしまった。

二人、向かい合って座っても、岬はしばらく悩んでいる様子だった。ややあつて、思い切ったように唇を開いた。月下の恋人、というサイトのことは、ご存知ですか。

「あの書評サイトのこと？ そういえば、もつずっと更新がないね」

「サイトの管理人が、茉莉の……さっきの女性、安東茉莉の姉だったんです」

「フーン、そうなんだ」

「安東夕美という名前で……去年の合宿中に、亡くなりました」

胸に、気持ちの悪いものを感じた。岬としては、同じように書評サイトを公開している薫にわかりやすく話したつもりだろう。しかし、サイトに新しい文章が載せられなくなった理由が、本人の死によるものだったということはできれば知りたくなかった。

「なにか、事故でもあったんですか？」

「どうも、二階のペランダから落ちたみたいで。コンクリートに頭を打ち付けたりしくて」

「それは、なんというか、ご愁傷様でした」

ぼんやりと、事情が呑み込めてきた。去年は大学の施設を借りていたのに、なぜ今年は鬼灯荘なのか。恐らくそれは、仲間を失った場所に集まりたくなかったからだ。

「事故、だったんだよね？」

「もちろんです！」

強く、岬は断言した。テーブルの上、握り拳が震えている。

「警察が来て、ちゃんと捜査しました！ その上で事故と判断されたんです！ そんな、夕美が誰かに殺されるはずがない！」

「でも、あのシールは……ねえ、去年の合宿に参加したのは誰？ 今年も、参加してるの？」

空閑寧子、無罪。

花牧薫、無罪。

当然だろう、去年の合宿には、寧子も薫も参加していないのだから。名前すら初めて知ったのに、安東夕美という女性を殺せただけではない。

殺せたのは、別の誰かだ。去年の合宿で、一緒に夜を過ごした誰か。

「花牧さんと空閑さん以外、全員です」

ポツリと、雨粒がテーブルに落ちてきた。少しずつ雨足が強くなっていく。しかし二人とも、すぐには席を立つことができなかつた。

2

二階の奥に、書齋があつた。壁一面が書棚になつており、写真集や百科事典など大判の書籍が並んでゐた。

書棚を眺めていた寧子に岬は声をかけ、岬から聞いた話を伝えた。

「あれは、そんなことが書いてあつたのね」

「え？ 寧子さん、住所録のアレ、見えなかつたんですか？」

「いえね、あの岬さんという方が、八畳間で男四人に突つ込まれてなんて話を始めるものだから」

薫は深呼吸した。

「なんか……ちよつと、がっかりだなあ。どうして僕が誘われたのか疑問に思つてたけど、要は新しいメンバーを入れることで去年とは雰囲気を変えたかつたんでしょうね」

「傷付いた？」 寧子が微笑んだ。

「まあ……それより、シールのことは謎ですね。まさかこ

んな、ミステリみたいなことが本当に起きるなんて」

「そうね。いまいち、意図のわからないメッセージだけど」
「警察が事故と断定したから事故だなんて、言い換えれば転落を直接目撃した人が誰もいなかったつてことですよね。だとしたら、誰かが突き落としたりとか、頭部を殴つた傷を

転落によるものに見せかけたとか、可能性はいろいろあるわけで。復讐を誓つた誰かが、あんなシールを……」

言葉を途切らせる。違和感を覚えた。

「怪盗の犯罪予告状と同じね」

背に指をかけ、斜めに引きだす。寧子は美術書をパラパラとめくつた。

「宝石を盗むなら、こつそり忍び込むほうがいい。予告状なんてあれば、いつもより警備を嚴重にされてしまう……復讐が目的なら、そんなメッセージで相手を警戒させてしまつては、かえつてやりにくいでしょう」

両手で抱えるようにして、美術書を棚に戻す。

「それより、薫が外にいた間、大変なことがあつたの」

「大変なこと？ なんですか？」

「大久保さんがビールをこぼしたの」

「ハア」それが大変なこと？

「大久保さん、料理のほうが一段落して、こっそり缶ビールを盗み飲みしてみた。たまたま、眼鏡をかけた若い方の腕がぶつかってしまって」

「ああ、木山君ですね、多分」

先程見かけたミニバンのことを思い出す。恐らく、あれに乗っていたのだろう。

「そうそう、木山さん。でも木山さん、わざとだったみたいで」

「わざと？ ビールをこぼさせたのが？」

「ええ。それなのに木山君、ちっとも悪びれないで。大変だな、肌はまだ染みただろう、シャワーを浴びるといい」と、薫は首を傾げた。確かに、以前会ったときの木山は冷たい感じのする寡黙なタイプだったが、そこまで人当たりの悪いようには思えなかった。

「なんだ、人前では脱げないのか。じゃあ俺の部屋に来るか。それとも俺が脱がせてやるのか。そう言って木山さんは眼鏡の位置を直すと、大久保さんのベルトに手をかけて」

「寧子さん、どこからが妄想ですか？」

「ああ、そうそう。三番目のシールがみつかったわ」

そつちを先に言ってください。うめく薫を、寧子は幸せ

そうな笑顔でみつめた。

薫が寧子と知り合ったのは、二年前の秋だった。オリジナル創作小説を中心とした同人誌即売会があり、それをきっかけにネットでの付き合いがある者同士で多人数の飲み会がとりおこなわれた。読書経験が豊富な寧子と会話が弾み、それ以来、同じようなイベントで会うことが多くなった。

ただひとつ、寧子が変わっているのは、妄想だった。初めの頃は「男子更衣室って、どんなコワイをする部屋なのかしら」などと真顔で質問されても当惑するばかりだった。やがて薫は、そういう意味不明の言動が、すべて「男性は男性に愛情を抱く」という仮定に基づいていることに気が付いた。

もちろん、そんなことを寧子は本気で信じ込んでいるわけではない。あくまで妄想であることを自覚し、薫以外の男性にそのような思考癖を明かすことも無いようだった。

シールの現物を確かめるため、薫と寧子は連れ立ってリビングに移動した。

先客が一人いた。大久保が書棚を眺めている。こちらは来客向けのサービスを意識したのか、書齋のほうとは異なり小説ばかりだった。考え込むように腕組みし、首をひねり、大久保は独り言をつぶやいた。

「英国庭園か、ブラジル蝶があればなあ……」

「有栖川有栖ですか？」

棚に並ぶのは海外ミステリがほとんどだった。大久保が口にした『英国庭園の謎』『ブラジル蝶の謎』は国内ミステリ作家、有栖川有栖の作品だ。有名な小説だが、ここには無いようだった。

驚いた表情で大久保は振り返り、気恥ずかしさを隠すようにくしゃくしゃと笑い顔になった。

「なんだ、いつの間に？ ハハ、ミイラ取りがミイラだ。もうすぐ夕食だから、花牧さんを呼んでこようと思っていたのに。うつかり本棚をみかけたら、忘れてしまっていました」

「料理のほうは、もういいんですか？」

「え？ ああ、違うんだ。」
「コック長は僕じゃなくて、岬君。僕は手伝ってただけ。買い出しに行ってた人達が戻ってきてくれたんで、晴れて暇になったわけさ」

「それでビールの試し飲みしてたわけですね」

「うわ、もう伝わってるの？ まいったなあ」

朗らかに笑いながら頭を掻く。薫は、大久保の肩やストラップの裾がわずかに湿っているのに気付いた。ビールをこぼした跡のようには見えない。視線に気付いたのか、大久保は声をあげた。

「これ？ 雨だよ。まだ岬君と話してるのかと思いついで、外にでてね」

「うわ、それはすみません」

「いやいや、よく考えたら、こんな雨の下で話し込んでるわけなかつたなあ。さっきはまだ降り始めて、もしかしたらと思っただけだね」

大久保が窓のほうを見るのにつられて、薫も顔を向けた。強い雨音が得体の知れない不安をかきたてる。

「薫、こつち」

声に振り向くと、寧子がガラスケースの前に立っていた。棚のひとつを指差している。大久保と二人、ケースの前に移動した。

死に神だった。黒衣をまとい、大鎌を肩に担いだ骸骨の置物だった。死に神が腰掛けている棺桶の蓋に、そのシールは貼られていた。

《岬英司》

《判決、無罪》

陶製で、高さは二十センチほどだろうか。棺桶のサイズよりもシールのほうが長いため、端は側面まで回り込んでいる。ガラスケースの中は水晶球やチェスセットなどが置かれていた。

「鍵はかかってないわ」

寧子が、ケースの戸を細く開けて見せた。

「あの……こんなことをお伺いするのはあれなんですけど」「構いませんよ。シールを貼れたのは誰か、でしょう?」「むしろ質問を待っていたとばかりに、大久保は口を開いた。

「結論から言うと、誰でも可能だったと思うな。ああ、もちろん花牧さんと空閑さんを除いて」

「さつき、ミニバンで誰か戻ってきましたけど」

「竜崎さんと木山君だね。買い出しにでてたのは、一時間ほどかな。でかける前にシールを貼ったということはありえると思う」

「このシールを作るには、なにか専用の機械が必要ですよね?」

「ああ、私も会社で使ったことがあるよ。それは後で、木山君に確認するのがいちばんじゃないかな。少なくとも私は見かけた覚えがないな」

なにかを振り払うように大久保は頭を左右に振り、軽く溜息をついた。

「なんなんだろうな。イタズラだとは思うけど、趣味が悪すぎる」

「夕美さんが亡くなった事件、なにか不審な点でもあったんですか?」

「さあ、僕はよく知らない。あのときはすぐに事故扱いになって、事情聴取なんかもおざなりだったしね」

チラリと視線をガラスケースに走らせ、少し思案する顔になってから大久保は、思いきったように口を開いた。

「実はね、あの晩、岬君はこっそり山荘を抜けだしてたんだ」

「え? 岬君がですか?」

「プライベートがあるから、詳しくは本人に訊いてくれなかな。表向き、これは秘密ということになってるから。要するに、岬君にはアリバイがあったんだ。だから、夕美さんを殺せたはずがない。三番目が岬君のシールなのは、

そういう意味だと思っ」

ノックの音がした。ドアを細く開け、プラスチック製の黒縁眼鏡をかけた青年が又ツと頭だけを突き入れた。

木山だと気付き、薫は挨拶をしようとした。しかし眼鏡の男は、食事ですよと小声でつぶやくと、顔をひっこめてしまった。

寧子がドアのほうへ歩いていく。後に続くこうとして、薫は足をとめ、振り返った。

「あの……変なことを訊くようですけど」

「なんでもどうぞ」

「木山君とぶつかって、ビールがこぼれたそうですが」

「うん、缶ビール片手にここでブラブラしててね、それでこのガラスケースにシールをみつけて、みんなを呼んだんだ。あ、そのとき花牧さんと岬君はまだ外にいたから、それ以外の全員という意味だけだ。で、木山君が急に後ろへ下がったのを避けきれなくてね」

「そ、その」

何度もまばたきをしながら、視線を宙にさまよわせる。

「木山君とはなにも……いえ！なんでもないです！すみませんでした！」

顔を真っ赤にして薫はリビングをでた。大久保が、キョトンとした目をしていた。

3

食堂に、七人の男女が集まっていた。岬がいつも通りの陽気な口調で挨拶をし、全員が簡単な自己紹介をした。

「竜崎だ」

スポーツマンタイプの男性が椅子から立ち上がり、軽く一礼した。額が広く、強面が体育教師を連想させる。

「大久保とは職場が同じで、その縁で参加してる。岬君には本当に感謝だ。まさか、こんな立派な館まで建ててくれるとはなあ……」

苦労しましたよ。いけしゃあしゃあと岬が応え、笑い声がさざめく。木山はまったく表情を変えなかった。

会話は和やかに進んだ。最近の話題作や有名作家のゴシップなど、話題はさまざまに広がった。絶え間なく笑い声が響き、ナイフとフォークが食器を打つのでさえ、楽しい音楽に聞こえた。

ときおり、遠くで雷鳴がした。雨風が窓ガラスを揺ら

した。ラベルシールのことは、誰も口にしようとはしなかった。

食事が終わり、全員が手分けして後片付けを始めた。頃合いを見計らって、薫は廊下の隅に岬を呼んだ。

「去年の合宿、岬君だけはアリバイがあったと聞いたんだけど」

岬は少し驚いた顔になったが、素早く左右に視線を走らせると、口を開いた。

「まあ、今更隠すことでもないですね。あの晩、自分は茉莉とでかけたんです。蛸を見物しに」

「てことは、茉莉さんもアリバイがあるんだ」

「そうなりますね」

「でも、どうしてそのことを秘密に？」

グツと喉が詰まったように、岬は眉を寄せた。薫から視線を逸らし、顔をうつむける。

「あの頃は……付き合ってることを秘密にしてたんです。去年、茉莉はまだ高校生でしたから」

安東茉莉は現在、F大学の一年生だ。N大学とは敷地が

近く、毎週のように例会で合コン話を頼まれると夕食のときに話していた。

「あ、なるほど。さすがのプレイボーイも、女子高生にまで手を広げたとは知られたくなかったんだね」

「うわ！ なんすかプレイボーイって！ なにをプレイするボーイですか！」

岬が突き飛ばすように薫の胸を叩いた。笑いながら薫はその腕をつかんだ。

全員がリビングに集まり、グラス片手にミステリ談義が交わされた。小一時間が過ぎた頃、大久保が自室にひきあげた。少し頭痛がするため、早めに休みたいとのことだった。薫が携帯電話の時刻表示を確認すると、午後九時を過ぎていた。

大久保と入れ違いに、風呂に入っていた木山が戻ってきた。木山がソファに腰を下ろすと同時に、岬が立ち上がった。

岬は、いつになく真面目な顔で一堂を見渡した。自然と会話が途絶え、視線が集まった。

「他にシールがないか、探してみましよう」

しん、となった。

「家捜しするってこと？」茉莉が声をあげる。

「個人の部屋は覗かない。さすがにそこまではしなくていいさ。風呂とか、物置とか、共用の場所だけでいい」

「放っておけよ」

竜崎だった。酔いもあるのか、不必要にドスの利いた声だった。

「こんな下らんことする奴ってのは、そうやって俺達があたふたするのを見物して面白がるもんだぜ。去年のアレは、事故だったんだ。隠していることが無いなら、堂々としてればいい」

「僕も、無理にとは言わないです」

強い意志が感じられる声で、岬は真正面から竜崎の顔を見据えた。

「去年のことも、事故だと信じてます。だけど、そうだとしてもこの犯人は許せない。無視するだけじゃなくて、なにか積極的な行動をとらないと気が済まないんです」

唇をへの字に曲げた茉莉が、私はパスと言った。苦虫を噛みつぶしたような顔をしている。

「私は参加します」

寧子が挙手した。慌てて薫も片手を挙げた。お前はどうだと岬が水を向けると、木山は少し逡巡した後でうなずいた。

薫がシールをみつけたのは、三十分後のことだった。

調理台の隅、薬箱にそれは貼られていた。

《安東茉莉》

《判決、無罪》

家捜しチームの四人が調理台を取り囲んでいた。

「参ったな」岬が顎をいじりながら、顔を斜めにした。

「さつきは無かったのになあ」

シールの探索は、一階を岬と木山が、二階を薫と寧子が担当した。しかし、二階の共用スペースといえば書斎からいしかない。探す場所が少ないため早く終わった。そのため、薫達は岬達が探した部屋をもつ一度確認していて、シールを貼られた薬箱をみつけた。

「俺達が探したときは、薬箱は棚の中にあっつし、シールも貼られてなかった。つまり、すべてのシールは初めから貼られているわけじゃないんだ。俺達の動きを見なが

ら、隙を窺って貼ってるわけだ」

岬が薬箱を手にとり、ためつすがめつしてから調理台に戻した。

「このラベルシールを作る機械、どこかにありますか？」

寧子が質問すると、木山は無言で首を左右に振った。

「そうだよな！こんな安っぽいラベル、この館の雰囲気合わないもんな！もつとこつ、カリグラフィで格好いいやつじゃないとなー！」

「……父さんなら怒ると思う」

ぼそぼそと、つぶやくような声で木山は言った。

「よし！じゃ、解散ー！」

木山が廊下への扉に向かった。続く岬の背中に、寧子が声をかけた。

「すみません、岬さん、ちょっとよろしいですか」

はい、なんですかと岬が振り返る。木山がでていき、岬、

寧子、薫の三人がキッチンに残った。

「去年、安東夕美さんとお付き合いましたね？」

笑顔だった岬の表情が、一変した。ピクッと肩を震わせるのが、ハッキリとわかった。

深々と寧子は頭を下げた。

「ごめんなさい、試すようなことをして。もう一つだけ、質問させてもらえるかしら。岬さんと茉莉さん以外で、他に去年の合宿でアリバイのある人はいますか？」

金魚のように岬は口をパクパクさせていたが、やがて放心した顔で答えた。

「いや……わからない。わかりません。竜崎さんも木山も、確か三十分くらい外出してた時間があつたと大久保さんに聞いたことがあるけど……それが夕美の死んだ時間帯なのかまでは……」

「そうですね、ありがとございます」

再び頭を下げ、寧子はキッチンからでていった。慌てて薫は後を追った。

「寧子さん！どついついことですか！」

薫が来ることを予想していたのだから、寧子は廊下の真ん中で待つていた。

「たいしたことではないの。かまをかけてみたら、当たっていただけ」

「だ、だけど、どつして？どつして安東夕美が岬君と付き合ってたなんて思ったの？」

「茉莉さんが、シール探しに反対したから」

唇をへの字にした茉莉の顔が、脳裏に蘇った。

「嫉妬してるのかしら、と思ったの」

薫は理解した。岬は安東夕美と交際していたのだろう。

しかし、恐らくは去年の合宿前後、妹である茉莉のほうと関係するようになった。だから、周囲には秘密にしていた。

茉莉が高校生だったからだけではなく、姉から妹へという外聞の悪い経緯があったからだ。そして亡き姉のために行動する岬に対し、嫉妬した茉莉はシール探しに反対した。

薫に背を見せ、寧子はリビングのほうへ歩きだした。

「フフ……フ……本当に、プレイするボーイだったわけね」

「え？ あの、寧子さん？」

見られていた。

廊下の壁に頭を寄せ、しばらく薫は立ち尽くした。

リビングで雑談を交わしつつ、交替で風呂に入った。途中で木山と茉莉が自室にひきあげた。フト薫は、いつの間にか竜崎がいなくなっていることに気付いた。

記憶を探る。十一時二十分頃、岬と入れ替わりに寧子が風呂に入ったが、そのとき竜崎もリビングをでていった。

トイレかとも思ったが、それにしては長すぎる。

どこかで煙草でも喫ってるんじゃないですか、そう岬が答えたとき、轟音がした。なにかを叩き付けたような大きな音だった。

パツと岬が立ち上がり、廊下へ飛びだした。続けて薫も玄関のほうへ走っていくと、レインコートを脱ぎこうとしている竜崎の姿があった。

「なんだ、お前達か」

「なんだじゃないでしょう、もう！ びっくりさせないでください！」

「いや、すまんすまん。突風のせいだな」

そうか、風のせいで玄関扉が急に閉まった音だったのか。ホツと胸を撫で下ろした。

しかし、竜崎の背後にあるそれを見た瞬間、薫は凍りついた。

「まったく、こんな夜中にどこ行ってたんです？ まさか飲酒運転してきたんじゃないでしょうね！」

「馬鹿、俺はお前達の代わりにだな」

「岬君！ 竜崎さん！ あれ！ あれ！」

二人の視線が薫の顔に集まり、そして指差す方向を見た。

玄関扉に、二枚の黄色いラベルシールがあった。

《竜崎芳雄》

《判決、無罪》

ガツン、と音がした。竜崎が上がりかまちを蹴りつけた音だった。

「クソ！ やられた！」

なにかをあきらめたような表情で、岬は薄笑いを浮かべた。

「まあ……いいじゃないですか、晴れて無罪判決を勝ちとったんですから」

「よくねえ！ こんなんでるときには無かったぞ！ 犯人の奴、戻ってきた俺がこれを見つけて悔しがるようにしむけたんだ！ 馬鹿にしてる！」

「てか竜崎さん、本当にどこへ行ってたんです？」

「シール探したよ！ お前ら、家の中しか探さなかったんだろ？ もしかしたら外にもあるんじゃないかねえかと思って、ぐるっと一周してきたんだよ！」

なるほど、それで戻ってきたら玄関に貼られていたのは、なおさら悔しいことだろう。薫は竜崎に同情した。馬鹿ですねえ、岬は楽しそうに遠慮のない言葉を放っている。

嫌な予感がした。

これで、あと残っているのは大久保と木山の二人だけだ。どちらか一方は、また「無罪」のシールが貼られるのだろう。しかし、もう一方は？

シールを貼っている人物が、本当に復讐者なら？ 確かに寧子が言った通り、こんなシールを貼っても相手をわざわざ警戒させるだけだ。しかし、それはあくまで推論に過ぎない。強い恨みを抱く復讐者なら、たとえ相手を警戒させてでも、そのような儀式的行動をとるかもしれない。

最後の一人に、復讐者は「有罪」のシールを貼るだけだろうか？

「探しましょう」

またなにか言い合っていた二人に、薫は声をかけた。

「シール、探しましょう、犯人は、竜崎さんだけではなく、他にもシールを貼ったかもしれません……いや、それより、大久保さんと木山君の安否を確認したほうが」

岬と竜崎が顔を見合わせた。

「ま、まあ、そこまではいいんじゃないかねえか？ 二人とも寝てるだろうしよ」

岬が額に手をあてた。考え込む様子だったが、すぐに口

を開いた。

「いや、ダメです！花牧さんの言う通り！いますぐ確認しましょう！」

「エート、待て待て。そつだな……手分けしよう。俺が大久保を、岬は木山君の様子を確認してくる。花牧さんは、シールがないかザッとそこら辺の部屋を確認してくる、てな感じでどうだ？」

岬と薫がうなずいた。三人が、小走りで同時に駆け出した。

これまでの傾向からしても、それほど凝った場所に隠すはずがない。薫は大雑把にキッチンと食堂を改めたが、シールは無かった。

「どうしたの？」

廊下に、風呂上がりの寧子が立っていた。薫は簡単に事情を説明した。

「あら、またシールがみつかったの。フーン、玄関扉……エントランスドアね」

いや、英語に訳されても。

「二階はどうかしら？一階ではまだ一度もみつかったな
いから、そつちに貼る可能性が高いと思うの。優先して探してみたら？」

タイミング良く、岬が戻ってきた。木山は無事だったらしい。一階を岬に任せ、薫と寧子は二階に向かった。

階段で、竜崎と擦れ違った。大久保の部屋は二階だ。無事だったかと訊く薫に、竜崎は首を左右に振った。

「わからねえ。あいつ、寝てやがる。ドア叩いたんだが返事が無くてよ、覗いてみようと思つたんだが鍵がかかってやがった。木山君にマスターキーかなんか借りてくる」

よろしくお願いします。薫は軽く頭を下げ、二階へあがった。

二階の廊下はし字形をしている。書斎は、階段をあがって突き当たりを左手奥に進んだところにあつた。

角を曲がった瞬間、寧子も薫もそれに気付いた。書斎のドアに、黄色いラベルシールが貼られている。

《木山耕太》

《判決、無罪》

一瞬、薫は後戻りしようかと思つた。残っているのは大久保だけだ。そして、ドアを叩いても返事が無かつたと竜崎は言っていた。

しかし、いま戻つたところで、鍵がかかつているのではどうしようもない。

寧子が、書齋のドアを開けた。明かりが点いていた。奥のほう、窓際に机があつた。一冊の本が置かれている。大判の写真集かなにからしい。

ゆっくりと、二人は机に歩み寄つた。それは、花の図鑑だつた。それほど高級な造りではなく、安っぽい紙に粒子の粗いカラー写真が印刷されていた。黄緑を下地に「Flower Book」というタイトル文字が並び、その下に、あのラベルシールが貼られていた。

《大久保俊治》

《判決、有罪》

図鑑は、背の上端が赤黒く濡れていた。シリンダー錠の鍵が、シールのそばに置かれている。それが、大久保の部屋の鍵であることは薫にも想像がついた。

「あざとい演出ね」

感情を抑えた声で、寧子がつぶやいた。

薫はシールと鍵をみつめていた。気が遠くなっていく感覚があつた。現実を現実として認識できない感覚。飛び散つた血の斑点が、シールの上で乾いている。

「あれ？」

「なあに？」

「血痕が……無い」

人差し指をそつと図鑑の表紙に近付け、寧子に指し示す。名前のほうには細かい血痕がいくつかあつたが、判決のほうには無かつた。

血の染みはシールの周囲にもあり、判決シールのところまで血が飛はなかつたわけではない。つまり、名前のシールを貼つてから殴つた。殴つた後で判決シールを貼つたため、そちらには血痕が残らなかつたらしい。

「どうして？」

なぜ、シールを連続して貼らなかつたのか。なにか、有罪判決のシールだけ後で貼らなければならぬ理由があつたのか？

寧子は顎に指をあて、軽くうつつむいていた。

4

覚悟はしていても、それは受け入れがたい現実だった。

薫が鍵を開けた。書斎でみつかったのは、やはり大久保の部屋の鍵だった。薫は鍵を差し込み、回し、抜いて、ドアを開けた。おおむけに倒れている大久保の姿が見えた。後頭部を殴られたのだろう、頭部の周囲に小さな血溜まりが広がっていた。

書斎のものほど立派ではないが、個室にも簡易デスクと椅子があった。大久保は、デスクのほうへ足を向けて倒れていた。

寧子がしゃがみこみ、大久保の手首に触れた。しかし、すぐに首を横に振った。

薫は死に顔を覗き込んだ。大久保はうつすらと唇を開け、目を見開いている。軽く顎に触れ、死後硬直が始まっていることを確かめた。

「素人判断ですけど……まあ、少なくとも死後一時間は経っています」

時刻を確かめた。午前零時だった。死斑を確認したいところだが、さすがに民間人がそこまでするわけにもいかない。

「大久保！」

竜崎の声がした。振り返ると、戸口に竜崎、岬、木山の

三人が立っていた。

寧子がゆっくりと首を横に振った。三人が、ゆっくりと部屋に入ってくる。竜崎が臉を見開き、一心に死者の顔を見つめていた。

書斎にシールや鍵があったこと、花の凶鑑が凶器らしいこと、血痕の不自然な点を薫は説明した。竜崎が腰を下ろして合掌し、慌てたように岬もそれにならった。

「凶器……凶鑑？ 書斎の？」

木山が、青ざめた表情で薫に訊ねた。

「どうして、凶鑑なんか……」

デスクのほうをみつめ、つぶやく。薫はハツとした。デスクには喫煙者用にクリスタル製の灰皿があった。手頃なものがあるのに、犯人はなぜ書斎まで行って凶鑑を持ってきたのか。

「薫、ちょっと」

寧子が、床の上のなにかを見下ろしていた。デスクと、大久保の足のちょうど中間辺りだ。

ボタンだった。プラスチック製のボタンが落ちていた。

「今日って、部屋は掃除した？」

薫は岬に声をかけた。しゃがみこんだまま大久保をみつ

めていた岬は、なにを言われたのかわからない顔をした。

「掃除した」木山が代わって答えた。

「業者に頼んだ。全部の部屋、掃除した」

「じゃあこれ、大久保さんが犯人のボタンってことですね」
腰を落とし、薫はそれをまじまじと観察した。背広の上
着用としては、ひとまわり小さい気がする。ワイシャツの
ボタンとしては明らかに大きい。

「どこのボタンだろ？」

大久保のほうを見る。半袖シャツ、ライトグレーのスラッ
クス。欠けたボタンは見当たらない。

「警察に、電話する」

きつぱりした口調でそう告げると、木山が部屋をでていっ
た。険しい目をした竜崎が、なにかブツブツつぶやいてい
る。岬が立ち上がった。

「犯人のボタンみたいですね。こんな夏真っ盛りに大久保
さん、上着を持ってきてるわけないだろうし」

「でも、こういうボタンの服、他に誰か着てたっけ？」

「なんだか安物のボタンですよ……あ、エプロンのボタ
ン？ そんなわけないか」

もう一度、薫はボタンをみつめてみた。確かに、のつべ

りと灰色で飾りも模様もなく、上着に使うボタンとしては
安っぽい。

「ファスナーの裏側にあるボタンでは？」

不意に、寧子が口を挟んだ。岬がきよとんとした顔を
する。

「学生の岬さんには馴染みがないかもしれませんが、こう
いったスラックスはファスナーの裏側にボタンがひとつあ
るのが普通です」

「そうなんですか？」

岬が確認するように薫のほうを見た。

「あるある。なんていうのかな、うっかりホックが外れて
も、社会の窓がガバツと開くのを防ぐため？ そっか、表
から直接見えないボタンなら、安物でもおかしくないね」
「空閑さん、よくそんなことご存知ですねえ」

「あら、私が男性の衣服について詳しいのは意外？」

「え？ あー！ いえ、す、すみません、そんな意味では！」

岬が慌てて頭を下げた。寧子が薫のほうを向き、ニッコ
リと微笑んだ。

「じゃあ、薫、申し訳ないけれど

大久保さんのズボン

を確認してくれる？」

薫は臉を細めた。

「俺がやる」

低い声がした。

竜崎だった。二つの眼が、獣のように尖っていた。

中腰になって大久保の腰辺りに移動すると、竜崎はベルトに手をかけた。

「……寧子さん」

「……寧子さん」

そつと背後に回った。他の者には聞こえないよう、小さな声でささやく。

「こういうとき……普通の女性は、席を外すと思います」

今度は、寧子が臉を細めた。唇の端がひくひくと痙攣している。フツと短く息を吐き、軽く顔を伏せると、寧子は

力無く肩を落として部屋をでていった。

リビングに、六人の男女が集まっていた。

大久保の死を報されると、茉莉は眉間に皺を寄せた。

「じゃあ、姉さんは……」

安東夕美を殺したのは、大久保だったのか。

「そう決まったわけじゃない」

たしなめる口調で岬が言った。

ガラスケースの前に、寧子が立っていた。薫は、ファスナーの裏側にボタンが無かったことを説明した。糸の端はほつれ、刃物で切りとったようには見えなかった。

「ただ、わかんないのが」薫は首を傾げた。

「どうしてあんなところのボタンが落ちたのかってこと。大久保さんスマートな体型だし、あのスラックスはゆったりしてるくらいだから、糸が弱っていて偶然落ちたとは思えないんだよね」

寧子が首を左右に振った。

「糸が摩耗していたなら、自然に落ちてても不思議ではないわ。体型がスマートでも、屈み込んだり運動したりすれば引っぱられるでしょう?」

いつの間にか傍に来た岬が、同調するようにウンウンとうなずいた。

「そうですね、他の解釈としては……着替え中に襲われたんでしょか? ベルトを外して、ファスナーを下げてとところで犯人が襲いかかった」

「あるいは逆に、大久保さんが襲いかかって、返り討ちに遭ってしまったのかもしいわね……」

「え？ いや、その場合は大久保さん、普通にスラックスを履いた状態ですからボタンはとれないんじゃない？ ああ！ 大久保さんが誰かを襲って、そのとき激しく身体を動かしたから落ちた、という意味ですか！」

薫は理解していた。寧子は、大久保がスラックスを脱ぎかけの状態で「襲いかかった」ことを想定している。

「仮に、ボタンが自然に落ちたのではないとすれば、犯人が意図的に落としたりした可能性もあるわね」

「え？ それはなんのためにですか？」

「さあ。推理小説なら、そんな解釈もあるかも、というだけ」

「犯人が……あ、ていつか木山、警察はいつ頃来るんだ？」

木山はソファに座っていた。背もたれに寄りかからず、真つ直ぐ背筋を伸ばし、虚ろな目で宙をみつめている。

「木山？ おい、木山？」

「呼んでない」

「ハ？」

「警察、電話してない」

「なんだ、そうだったのか。早く言えよ。じゃあ、俺が

電話……」

「どうして殺したんだ！」

木山が岬を見上げ、強い視線で睨んだ。キョトンとした顔で岬はそのまま動けなくなった。

「そんな、夕美さんのためだからって、どうしてそんな……」

涙がひとすじ、木山の頬を滑った。

「えっと、あの、お前、なに言ってるの？」

「大久保さんが夕美さんを殺したと仮定する」

努めてゆつくりと、薫は話し始めた。肩をピクツとさせ岬が振り返る。

「復讐を誓った人物が、ラベルシールを貼り、大久保さんを殺した。シールを貼った人物イコール犯人、ということになるね？（ここまではいい）」

岬がうなずく。木山が眼鏡を外し、袖口で涙を拭った。

「この山荘に到着したとき、住所録に寧子さんの名前が書かれたシールがみつかった。僕や寧子さんはそのシールを貼る機会が無かった。従って、除外。九時から岬君の提案で家捜しをしたとき、いつのまにか薬箱に茉莉さんのシールが貼られていた。このとき、竜崎さんと茉莉さんはリビングにいたから除外。残ったのは、木山君と岬君だけ。僕は、木山君がシールを貼らなかつたとは結論づけられない

けれど……木山君にしてみれば、シールを貼った覚えなんて無いから、残ったのは岬君だけ。そついうことかな？」
木山は動かなかった。うるんだ瞳で、ただ岬の顔をみつめていた。

口元を片手で覆いながら、寧子が薫の肩をそつと叩いた。

「ティツシユ、あるかしら？」

「持ってますけど、どうしたんです？」

「鼻血がでそう……」

「……お風呂にのぼせたんですね」

岬は、まっすぐに木山の顔を見返していた。不意に、なにか言いかけたが口をつぐんだ。室内を見渡すと、足早に移動しソファに腰を下ろした。

ローテーブルの上にメモ帳があった。その一枚を破りとり、胸ポケットに挿していた万年筆を抜く。

「みんな、一人ずつ順番に、九時以降の行動を話してくれ」

誰かが息を呑んだ。竜崎が顔をあげ、ニツと笑った。

「……なにを言ってるの？」

声を震わせながら、茉莉がゆっくりと立ち上がる。

「英司、なに馬鹿なこと言ってるの？ そんなの、警察がすることでしょう？」

「警察は呼ぶ。ただし、みんなの間で話をまとめてからだ」
「だからそんな必要……そんなに……そんなにお姉ちゃん
のことが大事？」

「違つ。夕美のことは、関係ない。俺が知りたいのは、誰
が大久保さんを殺したのか、それだけだ」

「だからそんなの警察がすることじゃない！ 私達が話し
合つだけで、なにがわかるつてのよ！ 指紋とか、検死と
か、科学調査なんて誰もできないでしょう？ なによこの
ミス터리馬鹿！ あなたまさか、名探偵にでもなるつもり
なの？」

岬が立ち上がった。真つ正面から茉莉の顔をみつめ返し、
大音声で言い放った。

「警察に任せた結果がいまのこれじゃないか！」

茉莉が、言葉に詰まった。

うるたえたように視線を逸らす。

「いや、違つな……俺が、悪かつたんだ」

崩れるように岬が座り込んだ。

「夕美は事故死だ、真相は警察がみつけてくれる、俺はそ
う思つて、思い込もうとして……逃げてたんだ」

頭を抱え、後頭部を掻きむしる。狂つたような腕の動き

が、少しずつ緩やかになり、やがてとまった。

「ダメなんだ……それじゃダメだったんだ。あのとき、納得できるまで考えるべきだったんだ。みんなに話を訊いて、積極的に行動して、考えて……真相は、自分でみつけるべきだったんだ」

へたりと茉莉も腰を落とした。岬は、手の平で顔を覆うと、洗顔するように揉んだ。ゆっくりと手の平を下ろし、ひとりひとりの顔をみつめた。

「みなさん、お願いです」

岬は、一礼した。ローテーブルに頭がつきそつになるほど、深く頭を下げた。

「N大学推理小説研究会会長、岬英司は、意見の交換を望みます。いつさいの妥協を許さない仮説検討、議論の心報、犯人の指摘を望みます。これは、社会常識を逸脱する行為です。後で警察とマスコミと世間にたっぷり非難されることうけあいの、馬鹿なミスリマニアの非常識な行為です。お付き合い頂ける方はこの場に残ってください。反対される方は申し訳ないですが、この部屋からでていってください。一生に一度のお願いです。どうか一緒に、真相を推理してください」

束の間の、静寂があった。

声もなく茉莉が立ち上がった。唇を噛んで、しばらく岬を睨んでいたが、やがて戸口のほうへ歩きだした。ドアを開け、引き止められるのを期待するかのよう振り返ったが、誰も声をかけなかった。

竜崎が立ち上がったのは、茉莉がでていくのとはほぼ同時だった。

「悪いが……俺には、家族がある」

強面が、歪んでいた。

「推理小説は好きだ。だがな、現実に犯人探しをやるのはまた別のことだ。岬、お前の気持ちはわかる。だが俺は……警察は、お前達の話が終わるまで呼ばない。それだけは、約束する」

くるりと背を見せ、竜崎はまっすぐ歩いていくとリビングをでていった。

「ハハ……」

岬が、気恥ずかしさを隠すように額を掻いた。

「やっぱ、そんな小説みたいにはいかないですね」

誰かが席を立つのを感じた。薫が視線を向けると、その人物は軽く頭を下げた。

「ごめんなさいね」

寧子だった。

ソファの背後をまわり、いつも通りの足取りで戸口のほうへ歩いていく。

「……寧子さん？」

トイレにでも行くんですか。そう続けたくなるのを、薰はこらえた。

ドアノブに手をかけたまま寧子は振り返り、薰を見た。

それから、書棚のほうに視線を向け、なにかをみつめていた。しかし、すぐに扉の向こうへ姿を消した。

「半分以下、か。男ばかりになっちゃいましたね」

岬が笑った。力のない笑いだった。

「いいですか？」

木山と薰の顔をうかがった。二人がうなずくと、始めましょうと岬は言った。

三人で順番に、午後九時以降の行動を語った。お互いに補足しあい、不在の者についても可能な限りメモ用紙に書き込んだ。

なんとはなしに、薰は書棚のほうを見た。寧子が去り際に、書棚のほうをみつめたのが気になっていた。

(英国庭園か、ブラジル蝶があればなあ……)

ぼんやりと大久保の言葉を思い出す。あれは、どういう意味だったのだろう。

なにかに導かれるように、立ち上がる。書棚に並ぶ背に目を通す。

エラーリー・クインの国名シリーズが並んでいた。タイトルに国の名前を冠した長編シリーズだ。国内推理作家、有栖川有栖はこれにあやかって『英国庭園の謎』など独自の国名シリーズを執筆している。そのため、国名は意図的にクインの作品にはないものが選ばれている。

(アメリカ銃……)

国名シリーズの一冊、『アメリカ銃の秘密』が、少しだけ手前にひかれていた。誰かが手にとった後、きちんと戻さなかったのだろう。

しかし薰が気になったのは、なぜ『アメリカ銃』なのかということだった。クインの国名シリーズで評価が高いのは、『エジプト十字架の秘密』や、『シャム双生児の秘密』などであり、比較的『アメリカ銃』は知名度が低い。しか

し、書棚に並ぶ他のシリーズ作品は整然と並んでいた。

突然、寧子の声が頭の中を過ぎった。

(フーン、玄関扉…… エントランスドアね)

鼓動が早まるのを感じた。ひとつの考えが浮かんだ。それは、たったいま生まれ落ちたとは思えない早さで成長を始めた。

(チャイナ・オレンジ…… Dは？ ああ、Dutch Shoeでオランダ靴…… エジプト十字架…… フランス白粉…… ギリシャ枢……)

背後が、急に静かになった。

「どっしたんです？」

岬が、不思議そうな顔をしていた。

「いや…… なんでも……」

自分の声が、遠くに聞こえた。ゆっくりと、ソファに戻る。柔らかなクッションに身を埋めると同時に、薫はひとつの名前に到達した。

解決編に続く